



箱入少女

春風琴
illustration・じろう
原作・クレージュA



ぶちはら文庫



オマンコの形を確かめるよう、
執拗に割れ目を弄る。

本物のお嬢様の処女オマンコは最高だ。
ふふ……ここにぶち込むのかと思うと、
股間がどんどん熱くなっている……。

キレイな色をしたオマンコには、
当然、汚れを知らない証である処女膜がある。
正真正銘の処女膜か……んんつ……
処女膜の味、もっと味わわせて貰おうか

プロローグ	冷めた男と箱入少女	5
第 1 章	翼と純真	12
第 2 章	白く汚されたお嬢様	47
第 3 章	快楽人形	96
第 4 章	育む愛	166
エピローグ	旅立ち	244

「は、はい……」

ユキノはおつかなびつくりな感じで、肉棒を再びその手に握った。
柔らかな指先の感触と手のひらの体温を感じるだけで、気持ちがいい。

「あ、あの……こ、こんな感じで……いいですか？」

「あ、ああ……いいよ……そのまま手でしごいて……」

「は、はい……先生……」

言葉に従つて、ゆつくりと手を上下に動かし始める。

「せ、先生……これで……いいですか？」

「いい……すごく気持ちがいいよ……桐原」

「こうしたら……男の人って、気持ちいいんだ……」

「ああ、そうだよ。桐原は上手だな」

その言葉にユキノの頬が赤みを増してゆく。



「じょ、上手つて……そ、そんな……私は……」

そんなウブな反応に、更に興奮が煽られる。

お嬢様の指に包まれて、肉竿は徐々に固くなつてゆく。

「あつ……なんか……すごく熱くなつて……ピクピクして……」

「気持ちがいいと……そうなるんだよ。いいから、そのまま続けて」

「は、はい、先生」

素直にそう答えたユキノは、肉棒をシコシコと手でしごき続ける。

「いいよ……桐原……あつ……ああ……」

「せ、先生……」

気持ちよさそうにしている姿を見て、少し安心したのかユキノは表情を和らげた。そして若干余裕が出来たのか、手にしたモノをマジマジと見つめる。

「これが……男の人の……お、おちんちん……なんだ……」

「ああ、そうだよ。これで男は女性を気持ちよくさせたり、種付けしたりするのさ」

「た 種付けつ……」

ユキノは思わず握ったペニスから目を逸らした。その反応がまた、可愛らしい。

本物のお嬢様ならではの反応に正義は満足した。

「ふふ……あまり見る機会など無いだろうから、しつかり見ておくんだぞ？」

「あつ……は、はい、先生」

手コキをさせながら保健体育を教えているような気持ちになる。何も知らない少女に、性を教え込むことほど楽しいことはない。

「こ、こんなに熱くなつて……どんどん大きくなつて……男の人のおちんちんつて……こんなに変わっちゃうんだ……」

「ああ、興奮すると、どんどん大きくなつて固くなるんだよ」

「ほ、本當だ……す、すごく……か、固い……」

触っているうちに、男性器にも慣れてきたようだ。

——そろそろ、本格的に奉仕して貰うとするか。

いよいよ、お嬢様のフェラチオを味わうときが来たのだ。柄にもなく正義は興奮してしまっていた。今までに多くの女子生徒を手にかけてきたのに、やはりユキノは別格だった。

「桐原……次は口で咥えてくれないか？」

「えつ？ く、口で……ですか？」

「ああ、そうだよ。桐原の可愛いお口で咥えて欲しいんだ」

「で、でも……口で咥えるなんて……」

さすがにペニスを口に咥えることには抵抗があるのか、困惑の表情が浮かぶ。取り繕うことを知らない箱入りのお嬢様は、すぐに顔に感情が出るのだ。

だからこそ、手に取るよう心がわかる。そして同時に、そういうときの対処法も正義にはよくわかつていた。

「イヤならないんだ……桐原……」

「えつ……？ せ、先生……？」

「……やつぱり無理だよな。口で咥えて欲しいだなんて……そんなことできないよな。汚らしく思つてただろう？」

「そ、そんなつ！ 私は、そんな汚らしいなんて……思つてないです」

「いや、そんな無理をしなくてもいいんだ。いやだつたら、もう終わりにしよう」

「そう言つてわざとこちらが引いてゆけば、」

「い、いやじやないです。先生のなら……わ、私……」

想定通り、ユキノは自らを犠牲にしてゆくのだ。

「……じゃあ、口でしてくれるのか？」

「は、はい……やります」

ユキノは自分に言い聞かせるようにそう言うと、股間に顔を近づけ反り返った肉塊をおそるおそる口に含んでいった。

「んつ……んんんつ……」

「あつ……ううつ……」

生温かい感覚が、ペニスを包み込んでくる。その感触に思わずゾクゾクしてしまうほどだ。生粹のお嬢様が、自分のペニスを口に含んでいる。それだけで、テンションが上がるというものだ。

「むううつ……んつ……んんつ……」

しかし、咥えたまま動く気配はあるでない。

むしろ、困惑した表情でこちらを見つめてくる。

「うつ……ううつ……」

「ああ、そうか」

咥えるとは言つたが、それ以上のことは何も指示していないのだ。

何も知らないお嬢様には一から教え込まないといけない。

「うぐうぐつ……うつ……むうう……」

やはり、やり方を教えない限り、ここから先には進みそうもなかつた。



どこまでもお嬢様なのだ。だが、それがいい。

桐原……これから俺が言う通りにするんだぞ
ユキノは肉棒を咥えながら小さく頷いた。

「そのまましゃぶつて……唇でしごくようになながら、舌で舐め回すんだ」

「ふあ、ふあひつ……んつ……んんつ……」

「そうだ……それでいい……うつ、うううつ……」

「あつ……うつ……くつ……んんつ」

かなり動きはぎこちないが、それだけに新鮮な感覚がある。
やはりお嬢様は、これぐらいぎこちない方がいい。

「んつ……んんつ……くつ……んんつ」

まるでテクニックなど無い、戸惑いがちの舌使いだが、それがたまらなく良い。
「いいぞ……いいぞ……ああ、気持ちいい……」

「うむうつ……んつ、んんつ……あふつ……むうう……んじゅる」

「ゆっくりしゃぶつたり……速くしゃぶつたり……色々試して欲しいな……桐原」

「あふつ……わ、わかりました……先生。んつ……むううつ……んじゅる……んんんつ」

ユキノは言われたことを、早速、従順に実行する。

試行錯誤しながら、口に含んだペニスに舌を絡めしごいてゆく。

こういうところにも桐原ユキノの生真面目さが感じられる。

「ああ……いいぞ……すごくいい感じだ……くつ……うううつ……その調子だ」

「んちゅ……んつ、んんつ……ふうむつ……ペちゃや……む、うううつ……」

裏筋を舐め上げるような舌の動きは、なかなか悪くない。

「……んつ、んんつ……あふつ……せ、先生……こんな感じでいいでしようか？」

「ああ、そのまま続けて……」

「は、はい……うむつ……うつ……んんんつ……んちゅ……むうう……」

ゆっくりとユキノの頭が上下する。

その度に、まるでアイスキャンディーでも舐め回すかのように舌が動いてゆく。

本物のお嬢様の舌は今までのどの女よりも、柔らかかった。

「うむううつ……んぐんぐつ……むつ、ううんつ……んじゅる……んちゅんちゅ……」

口からしゃぶる音が漏れると、場が淫らな雰囲気に包まれてゆく。

反り返ったペニスが唾液にまみれててらと光り、肉竿は血管が浮き上がつてビクンビクンと痙攣し始めていた。

「あうつ……先生の……すごく、脈打つてる……んつ……んんつ……」

「気持ちいいから……そうなるんだよ。桐原のフェラチオが……だんだん上手くなつてき
たから……」

「んちゅつ……んつ、んんつ……んふつ……ふえ、ふえらちお……つてなんですか？」
「そうやつて口で気持ちよくするのが……フェラチオっていうんだ。覚えておくんだよ」「は、はい、先生……」

「それじゃあ……しつかりフェラチオをしてくれないか？」

「はい……ううむつ……んつ……んじゅる……んちゅ……うううううつ」

促すとユキノはまた頭を振つてペニスをしゃぶつてくる。慣れてきたのか、その舌使いはだんだん大胆になつてきつつあつた。

「んぐんぐつ……ちゅ……んつ、んんつ……んちゅ……むつ、うううううつ」

それでも上品さは残つていて、舐め上げる舌の動きはかなり丁寧な感じである。

そこらのお嬢様とは違う、生まれ持つた気品というものを感じられるのだ。

「ああ……いいぞ……すごく気持ちいいぞ、桐原……」

「せ、せんせ……んつ……むううん……んちゅ……ふむう……んつ、んんつ……」

褒められる度に、ユキノのフェラはどんどんうまくなつてゆく。

純粹に、悦んでもらえるのが嬉しいらしい。

「……んつ、んんつ……んじゅる……んむううつ……くふつ……うううううん」

肉竿に絡みつく舌の感触、そして時折吸つてくる感じには、たまらないものがある。「むううつ……うぐうぐつ……んつ、んんつ……せ、先生……ど、どうですか？」

「い……いいよ。でも裏側も丹念に……舐めて欲しいな……」

そう指示を出すと、ペニスを咥えたままユキノは小さく頷いてみせた。

そして、亀頭の裏筋にその柔らかい舌を這わせる。

「……んんんつ……んちゅる……んむうううつ……」

「あつ……そ、そだ……うつ、ううううつ……」

擦れる舌の感触に、肉棒の先からは先走り汁がじわりと溢れ出でくる。

「うううつ……あふつ……な、何か……出できてる……うむううつ……んんつ」

「き、気持ちいいと……で、出るんだ……さ、先から溢れたお汁も舐め取つて……転がすように舐めて……」

「は、はい……んちゅ……んつ、むうう……うぐつ……んつ、んんつ……ど、どんどん溢

れます……んちゅ……うむうう」

「はあ、はあ……溢れた汁は全部舐め取つてくれ……うつ……ううううつ」

「んぶつ……んむううつ……わ、わかりました……じゅる……んむううん」

ユキノの舌が汁を舐め取る度に、ゾクッとする感覚が背筋を駆け抜ける。その感覚でまた新たな汁が、ジワリジワリと溢れ出してゆく。

「……んつ……んんんつ……ううむつ……あふつ、ううん」

「くつ……ううううつ……！」

「んちゅつ……んつ……むううつ……んぐつ……んんんつ……」
テクニックならもつと上手い女はいるかもしれない。しかし、ユキノのフェラにはそれ以上に感じるものがある。

この興奮は本物のお嬢様であるユキノがペニスを咥えているからだろうか？

舌使いはお世辞にも上手いとは言えない。それでも、異様な興奮が正義を包んでいた。

「あうつ……せ、先生の……すごく……脈打つて……うつ……うむうううつ……」

「あつ……ああああ……桐原つ……」

「んむうううつ……ペチャペチャペチャ……ふむうつ、んぐんぐつ……」

「うつ……くつ！ んんんつ！」

そろそろ出そうな感覚が股間に満ちてくる。そんなペニスに、舌がネットリと絡みついでてきた。

「……んんつ……あふつ……んじゅるる……むうう……んつ……ふううん！」

「き、桐原……くうつ……はあ、はあ、はあ……」

「んちゅる……んつ、んんつ……せ、先生の……すごく熱くなつて……ビクビクして……

むううつ……んつ、んんつ！」

「あつ……あつ……で、出るつ……うつ、くううつ……」

「睾丸が熱くなつて、マグマのように熱い白濁液が込み上げてくる。

もう、我慢できそうにない。

そのまま腰を突き出して、正義は迷うことなく、汚れを知らないお嬢様の口内に一気に精液を放つた。

「ん、んむ、んつ……んぐつ！ むつ、ううつ！ うむうううつ！」

いきなり口の中に出されたユキノは、驚いたように目を白黒させた。

それでも構うことなく肉棒を突き出して射精を続ける。

「ううつ、ううう、うううつ！」

「むううつ！ あううつ！ うぐうつ……ううううう！」

ドクンドクンと脈打つ度に、ユキノの口の中にザーメンが満ちてゆく。

その独特的の匂いと味に、ユキノは思わず顔を歪めた。

「うぐつ……く、くるしつ……むうう……」

「まだ……だ、出すぞつ……んつ！ くうつ！」

それでも込み上げてくる感覚に従つて、全ての精をユキノの口に注ぎ込み続ける。

唾液と精液が混じつて、ねつとりした感触がペニスを包み込んでかなり気持ちがいい。

「うむうううつ……うつ、ううつ……ごふつ……んんんつ」

出し続けるうちに、ようやくペニスも落ち着いてきた。

一滴残らず全ての精液を口の中に出し切つたのだ。

「はああ……すぐいいっぱい……で、出たな

「うつぶつ……うつ……うむううう……！」

「ふうう……すぐ良かつたよ……」

「満足げにそう言うと、萎え始めた肉棒を口から引き抜く。

「んっ……んんんんっ……ううううう」

口の中の精液をどうしてよいのかわからないという感じで、ユキノは困惑した瞳で見つめました。

「おつと……そとか」

何も知らない純粹無垢なお嬢様が、精液をどう処理してよいかわかるわけがない。

「ぐつ……うつ……うべつ……んんんんんっ」

頬を膨らませて精液を溜めたままのユキノに、正義はそつと囁きかけた。

「そのまま……それを飲んでくれないか」

「うつ……うううつ……」

ユキノは涙目になりながら小さく頷くと、喉を鳴らして精液を飲み始めた。

「うぐつ……んつ……んんんつ……うつくつ……うつ……うつ……」

「そうそう。全部飲み干しておくれ」

「……ぐつ……うつ、ううつ……んぐつ……んんんつ」

懸命に飲もうと喉を上下させ続けていたが、その動きが不意に止まる。

そして苦しそうな表情を浮かべ、口をもごもごさせた。

「どうした？ 大丈夫か？」

「うぐつ……な、なんだか……の、喉に……うぐつ……引つかかって……んんんっ」

かなり苦しそうに言いながらも、健気にも口の中の精液を全て飲み干してゆく。

「ごくんつ……んつ……んんんつ……あふつ……はあ……」

やつとの思いで飲み下した後も、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべていた。

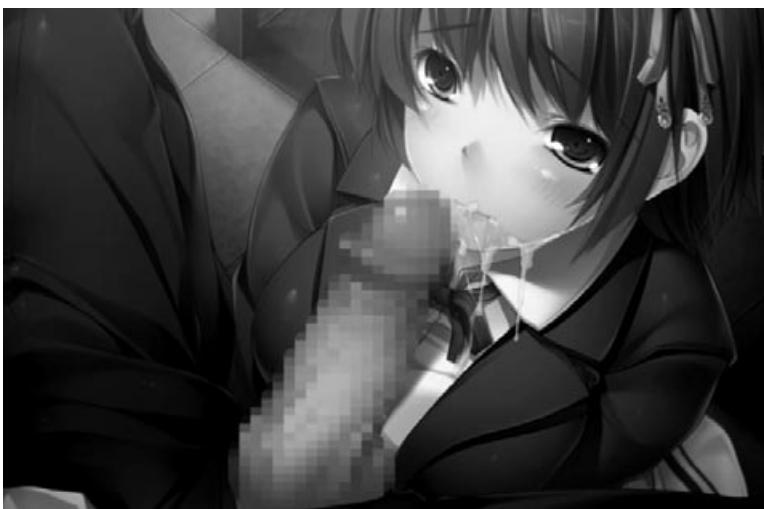
そんな表情を見て、正義に悪戯心が芽生えてくる。

「桐原……どんな味だった？」

かなり意地の悪い質問に、ユキノは少し考え込んで言つた。

「へ、変な味……です」

その瞳は、明らかに恨めしそうな感じに見える。



ぶちばら文庫

箱入少女

(はこいりしょうじょ)

2011年 4月 14日 初版第1刷 発行

■著 者 春風葉
■イラスト じろう
■原 作 クレージュA

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印 刷 所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをしては、
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示しております。

©SHIORI HARUKAZE ©CourregesA

Printed in Japan 2011

PP016



朝からまっしり

ミルクボット

Little Domo no Yori Hoshii! & growing on a shameful secret.

好評発売中

ふたなり美少女・ハレンチに
ひゅひゅ

章ごとに移り変わる、
パラレル・イラスト!



豪華ゲスト作家: あらいぐま・三色網戸・蜜キング

ぶちばら文庫09
蝦沼ミナミ著
みさくらなんこつ・他画
ハースニール原作
定価 670円(税込)

妄想暴走! あ娘様・伊織ちゃんの過激な日常
みさくらなんこつワールド全開!





投稿少女 Uploading Girl's Works

ぶちばら文庫11
春風葉 著
じろう 画
クレージュA 原作
定価 670円(税込)

描き下ろしカットも
新たに収録！(画:牧だいきち)



好評発売中

恥ずかしい姿、
みんなに見てほし
い！



paradigm ぶちばら文庫は ライター＆イラストレーターを募集中です！

「ぶちばら文庫」シリーズを盛り上げる、新たな作家を募集いたします。「ぶちばら文庫」は、ゲームノベライズだけでなく、オリジナル創作による美少女小説も刊行予定です。応募規定は、それぞれ以下のようになります。皆様のご応募をお待ちしております！

1. 募集内容

「ぶちばら文庫」シリーズでは、美少女ゲームやライトノベルを好む読者層へ向けた作品作りを目指しています。ご応募いただく場合も、ヒロインの個性や魅力が伝わるようなもの、シチュエーションへのこだわりが感じられるものなど、はっきりしたテーマのある作品をお願いいたします。題材はとくに限定していません。発表済か、未発表作品かも問いません。

2. 送付方法

小説の場合は、テキストデータをメールでご応募ください。コミックやイラストは、原稿用紙をお送りいただきても、データをお送りいただいても結構です。データが5MB以上の場合は、ファイル転送サービスなどをご利用ください。コミックには枚数の規定はありません。小説は1ページを17行×40文字として、50ページ以上の作品をお送りください。

3. 選考結果などについて

メールでご応募いただいた場合は、着信のご連絡は必ず行っています。選考は隨時行っており、締め切りはとくにございません。選考終了後、採用の方にのみ別途お返事をしております。通常はお返事までに、2週間～1か月ほどお時間がかかります。

4. 作品の送付先

ご郵送の場合は下記住所までお送りください。メールでのご応募は以下のアドレスで受け付けております。どちらの場合も必ず「お名前、年齢、ご職業、ご住所、電話番号」を書いた紙を同封するか、明記してください。メールの宛先: desk@parabook.co.jp

〒166-0011 東京都杉並区梅里2-40-19 ワールドビル202
株式会社パラダイム 「ぶちばら文庫作品応募」係

※ご応募の際の個人情報は、選考結果のご連絡にのみ使用いたします。

作品のご返却を希望の場合は、宛名を書いた返信用封筒と切手を同封してください。